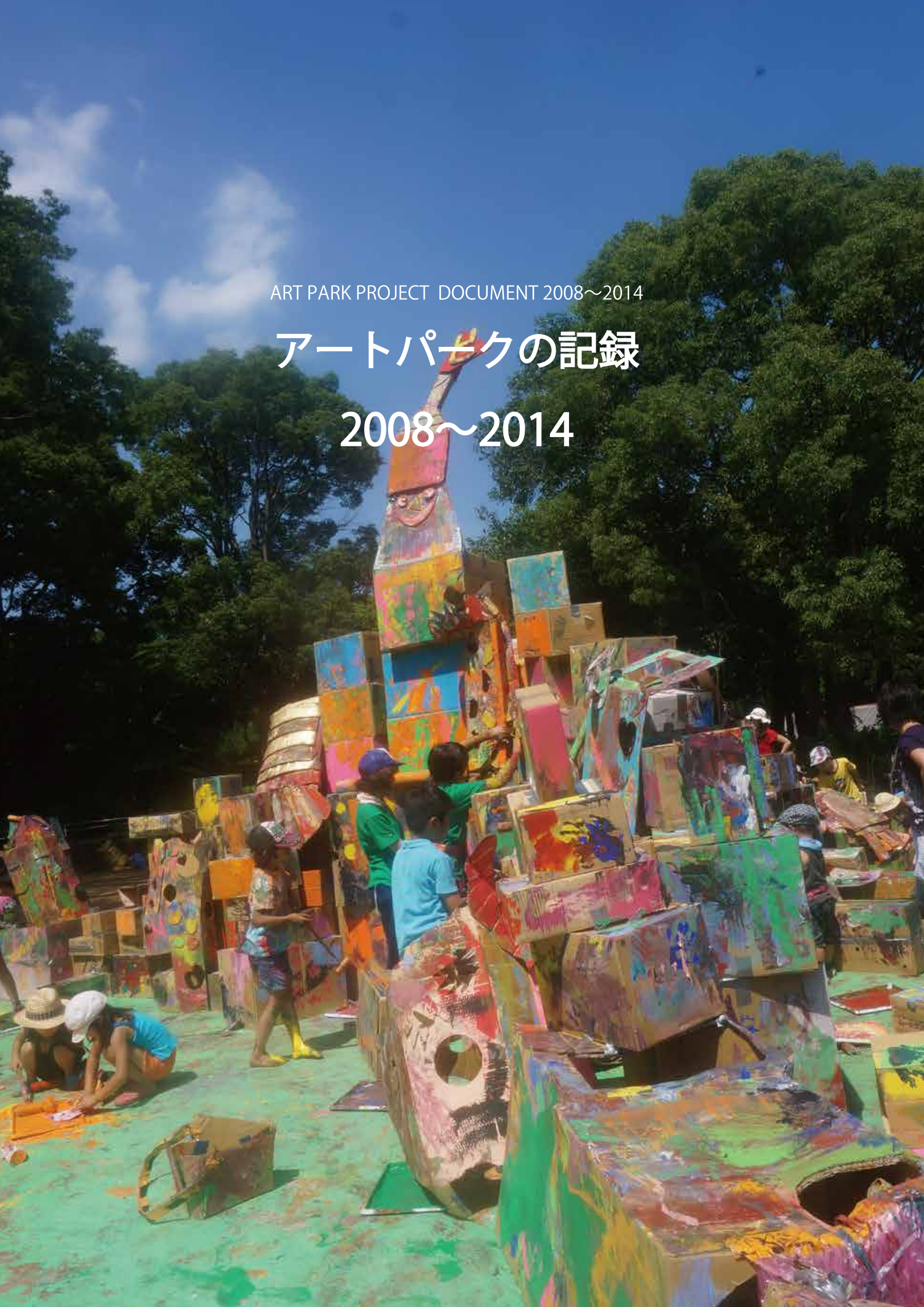


ART PARK PROJECT DOCUMENT 2008～2014

アートパークの記録

2008～2014



はじめに

「アートパーク」は、聖徳大学と地域、行政が協力し、松戸中央公園で2008年から行っているアートプロジェクトである。このプロジェクトは、様々な人々が関わりながら親子対象のワークショップを企画、実践する中で地域の課題に目を向け、学生の社会参画力育成や地域活性化を目的にしている。

この公園は、かつて、子ども達が元気に遊ぶ光景が日常的に見られた。子ども達にとって遊びの場は学びの場である。しかし、現在では社会の変化や様々な要因から子ども達が屋外で思いっきり遊べる機会が少なくなってきたおり、公園は閑散としている。こういった地域の現状を踏まえ、一日だけではあるが、子どもも大人も思いっきり遊んでみる事で子どもの遊びの重要性をみんなで考えてみようというのが「アートパーク」の試みである。

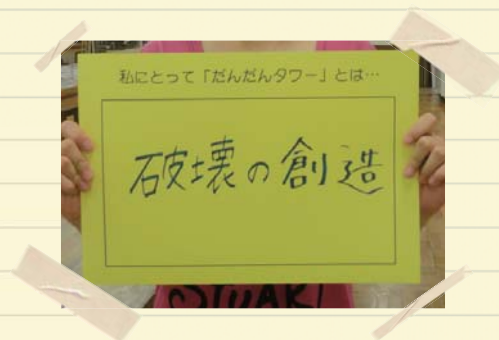
遊びとは、本来与えられるものではなく、子ども自身が工夫し、見つけて行くものであろう。「アートパーク」のアートはそのきっかけを生んでいる。作ったり、見たり、表現する事は楽しい！そう思える一日をみんなで作りたい。

…というのが、「アートパーク6」の記録映像の最後に流れるテロップのおおよその内容である。しかし、そもそも「地域活性化」ってなんだろう？「アート」ってなんだろう？「親子」「あそび」「公園」「ワークショップ」「教育」「まちづくり」「協働」などなど、「アートパーク」は光の当て方によって様々なキーワードが浮かび上がる。テロップの内容は基本的には間違っていない。しかし、言葉にするとどこか空々しく感じるのは「アートパーク」の活動が感覚的なことに由来しているからかもしれないし、そんなに簡単にまとめられる事でもないどこかで思っているからかもしれない。意外と手強い。しかし、こういったキーワードを内外の様々な人と意見交換をしながら活動を作って行くことが「アートパーク」であり、当日だけではなく、過程も含めた運動体なのである。

3回目のアートパークを終えて、学生の感想の中で気になった言葉がある。「アートパーク」を一言で言うと「破壊の創造」。破壊というとなにやら物騒な感じがするが、学生の中では、自分の中にあった価値観が活動をとおして一旦崩れ、新たな価値観が生まれたことを表している。「〇〇を壊して、〇〇をつくる。」「アートパーク」を続けているとこの〇〇に該当する言葉が実に沢山あることに気づく。

これからの「アートパーク」を考える為の資料としてこの記録集を作った。是非、「アートパーク」を皆さんとともに考えたいと思う。

聖徳大学 児童学科 准教授 大成哲雄



アートパークの記録 2008～2014

もくじ

- ・ P1 はじめに
- ・ P2 もくじ
- ・ P3,4 アートパークで大切にしていること…
- ・ P5 「集まれ！アートパーク ～公園改造計画～」(2008 年)
- ・ P6 「集まれ！あそびの天才」(2009 年)
- ・ P7,8 「集まれ！アートパーク ～音であそぼう♪～」(2010 年)
- ・ P9,10 「集まれ！アートパーク ～からだであそぼう～」(2011 年)
- ・ P11,12 「アートパーク5 ～こどものじかん～」(2012 年)
- ・ P13,14 「アートパーク6 ～みんな子ども宣言～」(2013 年)
- ・ P15,16 「アートパーク7 ～みんなゲイジユツ化宣言～」(2014 年)
- ・ P17,18 アートパークの作り方 大成ゼミの場合(美術教育)
- ・ P19 アートパークの作り方 野上ゼミの場合(家庭科教育)
- ・ P20 アートパークの作り方 短期大学部保育科有志の場合
- ・ P21,22 アートパーク 学生の感想
- ・ P23～25 アートパーク 座談会
- ・ P26 編集後記



2008 年 7 月 20 日(日)実施
参加親子 80 名



2009 年 7 月 5 日(日)実施
参加親子 160 名



2010 年 7 月 4 日(日)実施
参加親子 350 名



2011 年 7 月 10 日(日)実施
参加親子 500 名



2012 年 7 月 1 日(日)実施
参加親子 700 名



2013 年 7 月 7 日(日)実施
参加親子 1200 名



2014 年 7 月 6 日(日)実施
参加親子 1200 名

アートパークで 大切にしていること…

○場所を生かした活動

松戸中央公園の空間を生かし、中央公園ならではのオリジナリティのある活動を企画、実施します。暑ければ木陰を利用する等、自然とも上手に付き合います。公園の新たな利用法を提案して行きます。

○子どもたちの自主性

子どもたちの「やりたい!」を大切にします。大人から一方的に与えられる遊びではなく、きっかけ作りをし、遊びを発展させていきます。作品（持ち帰るための作品）を作ることが最終目的では無く、過程を大切にします。子どもはいつ来てもいつ帰ってもOKです。子どもたちが外で思いっきり遊ぶ機会があることは大切なことだと思っています。

※アートパークや『大成ゼミ』の活動では、受付等で研究、広報のための写真（動画）撮影と公開の承諾を保護者から得ています。

○大学と地域の協働

学内外の様々な人が繋がり協働で行います。
地域の専門家が意見交換をし、企画から実施
までチームになって行います。

○地域に文化を創る

地域の課題に目を向け「アート」「子ども」「遊
び」等をキーワードに「暮らしの芸術都市」
として地域が元気になるアートプロジェクト
(文化創造活動)を継続して行っています。
活動をとおしてメッセージを発信します。

○新たな学びの方法を考える

ワークショップ、アクティブ・ラーニング、
ドキュメント等の学びの方法を考えます。プ
ロジェクトを通し、新たな教育・研究プログ
ラムを実践します。

当日は企画者、学生、参加者(親子)が共に
学び合える場が生まれるよう配慮します。
学生は実践学修として教室だけでは学べない
多くの事を学んでいます。

○地域活動のノウハウ構築

地域活動、まちづくりのノウハウを蓄積し、
それらをリードする人材育成に繋がります。安
全性にも十分配慮し、企画者、参加者が安心
して楽しめる活動を作ります。
「来た時よりきれいに、アートパークをやる
と公園がきれいになる」を合い言葉に実施し
ます。



集まれ！アートパーク

～公園改造計画～

1

1回目と2回目のアートパークは、文部科学省の社会連携事業の一貫として行い、学生の社会参画力育成が目的の一つであった。当時の聖徳大学には、学生が地域に出て行う活動は殆どなく、手探りの状態で始まった。企画の進め方は「大成ゼミ」がアート（造形ワークショップ）を担当し、「大学の地域交流と社会貢献（生涯教育文化学科 齊藤ゆか、神谷明宏担当）」の受講生が全体のマネジメントを行った。3人の教員の他に地域のNPOや行政にも声をかけ、「地域子育て学ネットワーク」を立ち上げ企画をすすめた。

松戸中央公園を活動場所を選んだ理由は様々あるが、大学にとって最も近く、身近な地域であるはずの中央公園だが関心が薄かったことや、かつては沢山の子どもが遊んでいたが、今は閑散としているなど、子どもの遊びを手がかりに地域や社会の課題が見えて来たことがあげられる。こういった課題に目を向け、大学と地域が協力して企画をたてた。

初回は遊具がある場所で6つのワークショップを行った。絵具を使った造形遊びから、滑り台を変えたり、吹き流しのようなものを作ったりし、いつもと違う公園ができあがった。3ヶ月の準備期間を経てまさに「公園改造計画」が実現した。

集まった子どもたちと学生が自由に思いっきり遊べる時間を作れたことは今後の展開につながる内容であった。

主催／聖徳大学社会連携事業 共催／地域子育て学ネットワーク
後援／松戸市、松戸市教育委員会、松戸市社会福祉協議会



①

松戸中央公園（2008年）



④

集まれ！あそびの天才



⑤

2回目は生涯教育文化学科や児童学科児童文化コースが中心となり全体の企画を行ったこともあり「アート」から「あそび」へと一時タイトルが変更になった。アートの活動(造形ワークショップ)は「大成ゼミ」が引き続き担当し、遊具の近くの空き地に秘密基地のような「図工のおうち」を子どもたちと作った。また、広い場所では、竹馬や凧あげ等の伝承遊びを児童文化コースが行った。他にも場所を生かした様々なワークショップや体験ゲームを用意し、子どもたちは公園の隅々まで遊びを探し楽しんだ。

そういった中で、「図工のおうち」では、知らない子ども同士、しかも異年齢の子どもたちが、活動をとおして次第に仲良くなり、個別に作っていた家が徐々につながり大きな長い家になった。子どもたちと活動を行っているとき自己表現力、他者理解、協調性等が育まれていることが手に取るように分かる。初期のアートパークでは参加人数も程よかったので教員も学生も余裕がまだあり、一日関わっていると子どもの成長を実感できた。2回目は公園全体を使ったものの、更に場所を生かした活動が展開できないか？地域に必要な活動とはどういったものなのだろうか？…疑問点や反省点をもとに今後のアートパークの方向性を考えていく契機になった回であった。

主催／聖徳大学社会連携事業 共催／地域子育て学ネットワーク

後援／松戸市、松戸市教育委員会、松戸市社会福祉協議会



⑥

①当時の松戸中央公園。子どもたちはあまり遊んでおらず、閑散としていた。②開始の頃の様子。③障子紙に絵具による造形遊びを行った後、びりびりやぶいて吹き流しのようなものを作り架けた。④段ボールに絵具遊びをした後、滑り台につけ、オリジナルの滑り台を作った。⑤「図工のおうち」の「かんだの家」。⑥凧を作って凧揚げを楽しんだ。⑦木製の家。昨年も使った。⑧木工は特にプログラムとして用意していなかったが、大人気であった。これが「もくもく製作所」(2013)につながっていく。⑨「図工のおうち」は横にどんどんつながり増殖していった。



⑥



⑦



⑧



⑨

集まれ！アートパーク

～音であそぼう～

現在のアートパークの一応の形が出来たのがこの3回目である。文科省の社会連携事業も終わり、この回から聖徳大学生涯学習研究所が主催で行うことになった。

「アート」を「美術・音楽・身体表現・あそび」等と広い意味で解釈し、タイトルも「アートパーク」に戻し、学内外でより多くの人に関われるようにした。様々な分野が関わるため、統一テーマがあった方が良いということになり、今回は「音」をテーマにワークショップを企画、実施する事になった。

運営は全体のマネージメントを生涯教育文化学科が行い「大成ゼミ」や児童文化コースの他にこの回から教育学の「柴山ゼミ」や幼児教育の「関口ゼミ」、短大保育科有志（北沢）も加わった、地域からは昨年に引き続き「スーパー紙とんぼ」。「松戸子育てさぼーとハーモニー」もワークショップを実施することになり、全部で12のワークショップが公園の様々な場所を生かし行われた。

その内容は手作りの楽器「ブブゼラ」を作って演奏したり（「手作り楽器で遊ぼう！」）、音楽を聞きながらタワーを建て、ペインティング（「だんだんタワー」）。音のでる工作をして踊る「ダンス・ダンス・ダンス」。巨大ビー玉ころがし（「森のキンコンカン♪」）はまさに音を楽しむ企画だった。「音もだちランド」では鈴を鳴らしたい為に、ブランコを大きくこげるようになった子どもがいたなど、たくさんのエピソードが生まれた。

大学と地域、学科や教科の枠を超えた活動が形になった回であった。

主催／聖徳大学生涯学習研究所 共催／聖徳大学児童学科、聖徳大学生涯教育文化学科 後援／松戸市、松戸市教育委員会、松戸市社会福祉協議会

<ワークショップタイトル>

- ・「手作り楽器で遊ぼう！」「児童文化の場」受講生
児童学科児童文化コース 担当 神谷明宏②
- ・「だんだんタワー」「巨人」児童学科大成ゼミ（美術教育）①⑥⑦
- ・「森のキンコンカン♪」美術部⑤
- ・「ダンス！ダンス！ダンス！」③「ワクワク音迷路」⑨
全体のマネージメント、「生涯学習イベント企画Ⅱ」受講生
生涯教育文化学科 担当 齊藤ゆか
- ・「ハング ミュージック」、「サウンド アドベンチャー」⑫
児童学科柴山ゼミ（教育学）
- ・「砂よ輝け！絵本の森へようこそ」児童学科関口ゼミ（幼児教育）⑩
- ・「音もだちランド」短大保育科有志（北沢・美術教育）（GP事業）⑧
- ・「スーパー紙とんぼ」スーパー紙とんぼの会④
- ・「森の児童館」松戸子育てさぼーとハーモニー ⑪
- ・協力 松戸駅周辺にぎやか推進協議会





⑤



⑥



⑦

①ビニール製の「巨人」。みんなで立たせることに夢になった。この後、ペインティングをして再び立たせた。②ブブゼラを作り演奏した。公園のあちこちで「ヴーヴー」にぎやかな音が聞こえた。③「ダンス！ダンス！ダンス！」。④「スーパー紙とんぼ」。1回目から継続して参加。⑤ミラーの盤面には、公園の風景が写る。その中でビー玉が音を鳴らして落ちて行く。子どもたちが釘を打ったり、障害物を付けたりした。男の子に大人気だった。⑥最後に記念撮影。⑦約6メートルある「だんだんタワー」。⑧短大保育科有志は遊具を使った活動を行った。⑨段ボールで迷路を作った。⑩砂絵の活動。⑪児童館が公園に出張して来たイメージで活動を行った。⑫公園中央の雑木林の小道に音が鳴るものを作ってぶらさげ、鳴らして遊んだ。



⑧



⑨



⑩



⑪



⑫

集まれ！アートパーク

～からだであそぼう～

4回目はターニングポイントの回であった。この年の3月、東日本大震災が起こった。あわせて原発の問題も私達の生活に影を落とすようになった。アートパークは公園で子どもたちが思いっきり遊べる体験をサポートして来たが、放射能の影響で外遊びは自粛ムードに変わった。週刊誌では中央公園がホットスポットであるかのような表現がされ、開催を検討することになった。自治体や国が公表したデータや自主的に計ったデータ等をもとに議論し、開催しない事はむしろ公園が危険な場所であると公言することになるため、参加者が少なかったとしても開催することになった。しかし蓋を開けてみると昨年より多くの子どもと保護者が訪れ、今まで以上に学生と子どもたちがからだを動かし一日思いっきり遊ぶことになった。

「段ボール怪獣 マツドン（大成ゼミ）」(写真①)は「ゴジラ」(的なもの)がモチーフである。水爆実験で生まれたゴジラを今回この公園に立て、もどかしい思いをみんなで叫ぶことには意味があった。アートパークが社会に向け発信し、社会とつながる実感を持てた回であった。

主催／聖徳大学生涯学習研究所、聖徳大学児童学研究所
共催／聖徳大学児童学科、聖徳大学生涯教育文化学科
後援／松戸市、松戸市教育委員会、松戸市社会福祉協議会

<ワークショップタイトル>

- ・「段ボール怪獣 マツドン」児童学科 大成ゼミ(美術教育) ①④⑩
- ・「文化の森～まつど冒険王～」児童学科 児童文化コース 神谷明宏(レクリエーション) ③
- ・「青空プール」生涯教育文化学科 ②
- ・「ECO ボール」児童学科 柴山ゼミ(教育学) ⑤
- ・「おおきなパネルシアター & キャタピラー遊び」 ⑧
児童学科 関口ゼミ(幼児教育)
- ・「えのぐらんど」「ゆかいな仲間」短大保育科有志(北沢・美術教育) ⑨
- ・「ねんどランド」児童学科 奥村ゼミ(美術教育) ⑦
- ・「エコとしぼ作り」スーパー紙トンボの会
- ・「カプラーをつくろう！ナイアガラやタカイまつどタワー」
松戸子育てさぼーとハーモニー
- ・「コロコロころがれ すべりだいアート」アトリエミルクル
- ・「てるてるくんギャラリー」美術部 ⑥
- ・「マネージメント」生涯教育文学科 齊藤ゆか(ボランティア論)
- 協力 松戸まちづくり交流室 テント小屋

ART PARK
4



①この写真はうらわ美術館で行った美術教育の展覧会「え？授業の展覧会」(2014)のポスターにもなった。右下は手伝いに来た附属高校の生徒。②「新聞紙プール」は屋外でも楽しいことが分かった。③「文化の森」毎年、児童文化コースの一年生が頑張った。大縄跳び。④「マツドン」のペインティング。長いローラーが大活躍。⑤色々なボールを作り、投げて遊んだ。⑥美術部はエアパッキングに人型をとり、モデル本人が着色して公園に吊るした。⑦大量の粘土で遊ぶ。⑧お手製の巨大パネルシアターを実演。⑨はじめての絵具遊び。「えのぐらんど」 ⑩長い風船で遊んでいるとドーンじゃんけんが始まった。



アートパーク5

～こどものじかん～

5回目のアートパークは、より地域と活動を作っていく試みとして、学内の一部団体と地域団体がチームになりワークショップの企画をたて実施した。地域とチームになることで企画段階からそれぞれの活動場所を訪問する等交流が深まり、今迄にない展開が生まれた。

教育学の「柴山ゼミ」は本学卒業生が代表の造形教室「アトリエミルクル」と組み「こどもトンネル」を実施した。お互いが持っている理論と実践のノウハウを生かすことで、授業（ゼミ）内容にも変化があった。また、短大保育科有志（北沢）は、地域で造形に力を入れている保育園KEYAKIDSとチームになり「ふみふみはなが」を行った。「大成ゼミ」は「まちづくりクリエイティブ」と「松戸アートラインプロジェクト 2010」から継続的に活動を行っている。まちづの「おやすみ処」は、動的なワークショップが多い中、ゆっくりした時間を共有する楽しさを提案。主婦のグループがチラシでアクセサリを作るワークショップを行った（後に「じゅんぴしつ」につながっていく）。「奥村ゼミ」は児童館（ハーモニー）と「ハンドランド」を行った。「細戸ゼミ（社会科）」の水風船合戦は、今迄に無い短時間で盛り上がる活動であった。家庭科の「野上ゼミ」はこの年から「しゃぼん玉研究所」で参加した。公園のいたるところでそれぞれの時間が流れるアートパークであった。

また、今回、生涯教育文化学科と児童文化が他の活動に移行したため、全体のマネジメントを学内で手分けし地域と協働で行っていくことになった。学内からは、3年生でアートパークを経験した4年生が「4年生お助け隊」として受付や、絵具等で汚れた子どもを洗う等、全体をサポートした。主催も児童文化研究所が加わり、生涯学習研究所と学内の二つの研究所の事業になった。

「こどものじかん」の大切さをメッセージとしてサブタイトルに込めた。

主催／聖徳大学児童学研究所、聖徳大学生涯学習研究所 共催／聖徳大学児童学科、聖徳大学生涯教育文化学科 後援／松戸市、松戸市教育委員会

<ワークショップタイトル>

- ・「ぐるっとタワー」児童学科大成ゼミ（美術教育）②⑦⑩
+「おやすみどころ」まちづくりクリエイティブ⑪
- ・「こどもトンネル」児童学科柴山ゼミ（教育学）+アトリエミルクル⑧
- ・「ハンド・ランド」児童学科奥村ゼミ（美術教育）+松戸子育てさぼーとハーモニー①④⑫
- ・「ふみふみはなが」短大保育科有志（北沢・美術教育）+KEYAKIDS⑥⑭
- ・「しゃぼん玉研究所」児童学科 野上ゼミ（家庭科教育）③
- ・「こねてみないか？ どんどころどろ どろりんちょ」
児童学科 細戸ゼミ（社会科教育）⑨
- ・「ぶらさげルンルン！」美術部⑤
- ・4年生お助け隊（児童学科）⑬
- ・協力 クリエイティブまつど工房



ART PARK 5





①「奥村ゼミ」が突如仕掛けたスズランテープのワークショップ。②「ぐるっとタワー」の活動を見守る保護者たち。今後、保護者をどう巻き込むかが課題となる。③野上ゼミ生はしゃぼん玉研究所員になり全員白衣を着用。④この回から蚊帳を使って空間演出を考えて行きます。⑤美術部の「ぶらさげルンルン!」。色々な形に切った紙を繋ぎ合わせて吊るす活動。⑥「ふみふみ版画」の作品。⑦タワーの周りを囲んだら、絵具だらけの活動に拍車がかかった。⑧子どもに返るトンネル。⑨水風船合戦。盛り上がりました! ⑩ 聖徳版「太陽の塔」の回りで電車ごっこがはじまった。⑪ チラシで小物を作る。⑫ ハンドランドの人気者。⑬ この回から4年生お助け隊が全体をサポート。⑭ 「ふみふみ版画」入口のモニュメントは本学卒業生の保育士が制作。



アートパーク 6

～みんな子ども宣言～

運営方法や組織体制、ワークショップの内容等、様々な意味でアートパークの一つの到達点がこの6回目と言えるだろう。参加親子も1200人になり、2008年に始まった頃と比べると松戸市全域から参加者が訪れるようになった。アートパークを一日楽しもうと計画をたてて参加するリピーターも増加した。参加者が増えた理由の一つとして市の広報誌で大きくとりあげて貰えた事が大きい。宣伝の方法も松戸市を介して効果的に行えるようになった。

アートパークで一番暑かったのがこの回であろう。毎回、給水所を2カ所設置する等、熱中症や食中毒には十分注意をはらっている。暑い中でも安全に活動を行えているのは、地域の諸団体からのアドバイスやアートパークの5回までのノウハウの蓄積あつてのことだと思う。

今回のサブタイトルは、前回の「こどもじかん」を發展させ、子どもは子どもとして思いっきり、大人は子どものように遊んでみようと言うのがメッセージである。

事前の準備も含め各ワークショップの内容もユニークでオリジナリティのあるものが多かった。「ピカソチック」では学生が作った「ピカソちゃん」が服や、アスレチックの一部に変化した。「おかしな家」を作る事はケヤキズの保育士の長年の夢であった。子どもたちが空き箱等でお菓子をすることで緑の中にカラフルな家が完成した。木漏れ日に着目した活動「こもれび すいぞくかん」。大量のスライム、木工工作、カプラ…帽子を作る活動も充実していた。美術部は「アトリエミルクル」と協力してパレードを行った。各ワークショップを結ぶ役割を果たし、アートパーク全体が一つにつながった。

主催／聖徳大学児童学研究所、聖徳大学生涯学習研究所

共催／聖徳大学児童学科 後援／松戸市、松戸市教育委員会

<ワークショップタイトル>

- ・「ピカソチック」児童学科大成ゼミ（美術教育）①⑧
- ・「こもれび すいぞくかん」児童学科柴山ゼミ（教育学）⑩⑫
- ・「おかしな家」短大保育科有志（北沢・美術教育）+KEYAKIDS ③④
- ・「The Matsudo Hatter ～いかれ帽子屋～」児童学科野上ゼミ（家庭科教育）⑤⑨
- ・「こねてみないか？ どんどころどろ どろりんちょ 2」児童学科細戸ゼミ（社会科教育）⑥
- ・「クルクル象バスパレード」美術部+アトリエミルクル②
- ・「みどりのなかで…カプラで…あ・そ・ぼ」
松戸子育てさぼーとハーモニー ⑪
- ・「森のもくもく製作所」⑦&「おやすみ処」松戸まちづくり会議
- ・4年生お助け隊（児童学科）
- ・協力 クリエイティブまつど工房





③



④



⑤



⑥



⑦

ART PARK 6

①「ピカソチック」上から見ると実は放射状。②パレードは今回がはじめて。楽団は地域のアイリッシュミュージックの若者グループが担当。③④保育士の子どもの頃からの夢が実現「おかしな家」。子どもたちが作ったお菓子の工作でどんどん変化した。⑤様々な形の帽子をかぶった子どもたちが増殖中！⑥大量のスライム。大人気でした。⑦木工作も大人気。地域から出た廃材を利用。卒業生もスタッフとして手伝った。⑧「ピカソちゃん」になることが大成ゼミ流「みんな子ども宣言」。⑨ユニークな帽子の作り方 ⑩⑫ 実は木漏れ日が魅力的なことに気づかされた活動。「こもれび すいぞくかん」。⑪ カブラ。蚊帳を使った空間演出は涼しさも演出。奥のテントは授乳室も兼ねている。



⑧



⑨



⑩



⑪



⑫

アートパーク7

～みんなゲイジツ化宣言～

震災以後、使われなくなったプールは壊され、跡地には更地の広い空間が生まれた。この場所では、初参加の「小泉ゼミ」が、アートとサイエンスを融合したワークショップを行い、「関口ゼミ」は「大きな世界」を体感する活動を行った。今回は様々な場所で10のワークショップが行われた。

中央の雑木林には「まちづくり会議」がカフェをデザインし、焼きそばを食べながら短大保育科有志（北沢）の活動で作った子どもたちの作品を鑑賞できるギャラリーが生まれた。焼きそばの収益はまちづくりの費用にあてられる。初参加の短大保育科Ⅱ部有志（永井）の「木っと、ともだち！」では聴診器を持って木の声を聞くツアーが生まれ、公園の木に着目した活動を行った。「大成ゼミ」の「きのこロボット」では、段ボールが例年以上にしっかりしていたため、活動が横に広がるだけでなく上下にも及んだ。このロボットは、この後、地域の盆踊りに登場したり、映像作品にもなった。「もくもく製作所」では、年の数だけ木片をつなげて遊んだ。

アートパークでは、ずっと、保護者を巻き込む手だてを考えてきたが「野上ゼミ」の「まつどのコックさん」はその課題の一つ解決する方法を見つけた。古新聞をメイン素材に食べ物をつくる活動は、コックさん（子ども）にオーダーするのは保護者であり、制作をとおしコミュニケーションが生まれていた。

今回も前回に引き続き、約1200名の参加者で賑わった。受付等で混乱しないよう事前の準備を「4年生おたすけ隊」を中心に練っていたが、当日は参加者も心得ていたのか、時間をずらしての参加が増え、企画者、参加者の間に暗黙の「あ・うん」の呼吸が生まれているようにも感じた。アートパークが更に参加者と共に作って行く活動に発展して行く事を願いたい。

主催／聖徳大学児童学研究所、聖徳大学生涯学習研究所

共催／聖徳大学児童学科 後援／松戸市、松戸市教育委員会

<ワークショップタイトル>

- ・「きのこロボット」児童学科大成ゼミ（美術教育）③④
- ・「まつどのコックさん」児童学科野上ゼミ（家庭科教育）⑧
- ・「おおきな世界」児童学科関口ゼミ（幼児教育）⑩⑫
- ・「素材からのひらめき ～アートとサイエンスは友達～」
児童学科小泉ゼミ（美術教育）⑨
- ・「まつど Atelier・まつど Museum」
短大保育科有志（北沢・美術教育）+KEYAKIDS ①②
- ・「木っと、ともだち！」短大保育科Ⅱ部有志（永井・幼児教育）⑤
- ・「くるくるどうぶつパレード」美術部 ⑪
- ・「空に向かって、カプラ・KAPLA・カプラ！！」
松戸子育てさぽーとハーモニー⑥
- ・「☆もくもく製作所 ほしめぐり☆」じゅんびしつ⑦
- ・「おやすみ処」松戸まちづくり会議
- ・4年生お助け隊（児童学科）
- ・協力 クリエイティブまつど工房



ART PARK 7





①②「まつど Atelier・まつど Museum」の様子。受付は保育園の子どもたちが行った。③「きのこロボット」は中央公園の地下の巨大ロボット工場で生まれた設定。初めて、終了後に壊さず残した作品。④大学の新しいゴミ箱が入っていた段ボールが意外にも丈夫であった。⑤木の音を聞く。⑥今年もゆったりしたカブラの時間が流れた。⑦中央から放射状に伸びる星座を歳の数だけ作った。⑧おねえさんからのオーダー後、完成したスパゲティ。⑨空気砲。他に糸電話なども楽しめた。⑩⑪大きな紙で折り紙を折る等、全身で大きなものを体感した。⑫今年のパレードは美術部単独で行った。動物の仮装が随分凝っていた。



アートパークの作り方

準備編

大成ゼミの場合（美術教育）

「大成ゼミ」は児童学科の3年次に「美術教育」や「アート」について、学びたい学生が受講します。1年間の大まかな流れは、前期に「アートパーク」を企画、実施し、後期は市内のアートプロジェクト「暮らしの芸術都市」で活動。年明けは鑑賞活動を市内の中学校、保育所等で行います。いずれの活動も地域に出て、実践をととしてアートや教育について学んでいきます。

4月、「アートパーク」の企画書を書いて選抜された10名程の新ゼミ生は、まずガイダンスで過去の活動を映像資料等を見ながら「アートプロジェクト」、「ワークショップ」、「ファシリテーター」の語意を理解します。そして、2回目以降は、教室や松戸中央公園で実際にワークショップを体験し、アートパーク当日のイメージを高めて行きます。最初の「教室を変えるのだ!」（写真②）では、図工室にある物を、その名前や用途を忘れ、造形遊びを行います。気になる部分を写真に撮ったり、居心地の良い場所を見つけて楽しみます。

次は、徒歩数分の中央公園に長いビニールを持って行き、空気を入れてみんなで遊びます（写真⑧⑨）。いくつ遊びが生まれるか即興でトライします。一步引いて緑の中でビニールがどう見えるか、公園のつくり、大きさ、色などにも興味を持ち、遊びながら空間の広がりを確認します。「もの」と「場所」と「ひと」が出会った時にどのような活動が生まれるか、体験的に学修し、ファシリテーターの役割の重要性も理解します。

少しずつチームがほぐれてきたところで、企画を考えます。各々が考えた企画書をもとに全員でアイデアを練ったり、素材に触れ、遊びの中からきっかけを見つけていく等、年によって様々です。「大成ゼミ」では、「アートパーク」初回から段ボールと絵具をメイン素材に使っています。それは、毎年、「大きいものを作りたい!」「ダイナミックな活動がしたい!」といった学生の希望が多いためです。アートパークは学生の「やりたい」と子どもの「やりたい」が良い意味で化学反応を起こす場です。学生の「やりたい」を高めて行く事がその年の成功につながります。

週に1時間のゼミで出来ない部分は空き時間を使って交代で進めて行きます。アートパークを終えた後の振り返りも重要です。準備、当日の活動記録は、学生が交代でブログに記録し、ドキュメントを残します。アートパークは当日迄の過程が重要であることも理解して行きます。

児童学科 准教授 大成哲雄

①ビニール製の「巨人」。この年は、「だんだんタワー」と「巨人」を立たせる事に夢中になった。(2010) ②「教室を変えるのだ!」。自分の中にあるものを壊したり、組み替えたりしながら創造することをグループで楽しむ。チームで活動して行く為のウォーミングアップ。(2013) ③「ピカソちゃん」のデザインを画集を見ながら考える。(2013) ④「ピカソチック」大詰め。イメージを共有する為に、教室に組んでみた。中央から放射状に組む。完成後は⑫を参照(2013)



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧



⑨



⑤⑪「きのこロボット」制作風景。ロボットの身長は天井の高さより高いので教室で全部組み立てるのは無理であった。(2014) ⑥⑩たくさんのビニール傘を公園に持っていき活動を行った。4年生も参加。教室との見え方の違いも学修した。(2011) ⑦「マツドン」制作風景。板段ボールを電ノコでカットする。大きいので二人掛けで行った。(2011) ⑧⑨公園に長いビニールを持って行く。形が変わるたびに遊びが生まれる。最後は風にして走ったり、身にまとい洋服になった。(2010, 2011) ⑫「ピカソチック」記念撮影。ゼミ OG も参加。(2013)



⑩



⑪



⑫

アートパークの作り方

野上ゼミの場合（家庭科教育）

家庭科のゼミがアートパークになるまで

夏の暑い日に、片付けまでやり終えた瞬間、充実感一杯のアートパークだが、1ヶ月後の学生たちの感想は「アートパーク、意味わかんないし」だった。家庭科は生活そのものを題材として考える教科であるため、何を扱ってもなじみやすいといえる。しかし、アートパークだけは手がかりがなく、試行錯誤の3年間であった。ゼミの様子をふり返っても、会議と実験を試行を繰り返している。

1年目は、「しゃぼん玉研究所」を設立した。ゼミの時間には、しゃぼん玉で絵を描けるのではないかと、しゃぼん玉に色をつけられるのではないかと、実験を重ねた。そして創造的な要素が必要だと考え、しゃぼん玉液に色をつけて半紙に絵を描くワークショップを行った。結果的には、しゃぼん玉で遊ぶだけでも十分に楽しいということがわかった。

翌年、アートを粧うことをやめて開き直ったのが「Matsudo Hatter ーいかれ帽子屋ー」である。着想のきっかけは、あるゼミの日に、思いつきで新聞紙を着てみたところ、一同、すっかり愉快的気分になってしまったことである。しかし、夏の暑い時期に向いていないのではないかとということと、子どもが自作できるかという点を考慮して、帽子屋を営むことになった。当日は、ユニークな帽子がいくつもできあがり、顧客満足度は高かったといえる。

3年目は、環境への負荷が少ないことと経済的であることも考えた方がよいという意見が出た。また、帽子屋の時に、親子で協力して作り上げる光景が少なかったという反省を教員から伝えた。その結果、子どもがコックさんになり、保護者から注文を受けて新聞紙で料理をつくるという活動が生まれた。新聞紙以外の素材として、使用済みの食品トレイやテイクアウトの食器を洗って器として使い、少し本物らしさを加えることもできた。これらは功を奏し、「まつどのコックさん」では親子でアイデアを出し合いながら作品をつくる姿が見られた。

家庭科のゼミでなぜアートパークなのか。家庭科は家事の技能を学ぶだけの教科ではないのだが、ものづくりを重視していることも事実であり、今後は理論的な意味づけを学生と共有していくことが課題だと思っている。

児童学科 准教授 野上遊夏

①「しゃぼん玉研究所」にて検証実験中。(2012) ②新聞紙を着て会議中。この後、帽子に発展しました。(2013) ③新聞紙でハンバーガー。おいしそうです。(2014) ④「まつどのコックさん」たち。作品の下に付いているのは注文票です。⑤「Matsudo Hatter ーいかれ帽子屋ー」新聞紙をかぶって集合した若き帽子職人たち。(2013)



アートパークの作り方

短期大学部保育科有志の場合

地域みなさんに感謝！

短期大学部保育科の特徴は、有志参加にあります。入学したばかりの1年生に、今迄のアートパークの画像等を見せ、ねらいや内容を説明して参加を呼びかけ「やってみよう！」という意欲や好奇心のある学生が集まります。活動時間は放課後です。参加する学生は、保育所との連携、子どもたちとの交流、広い公園での活動に魅力を感じているようです。授業では体験できない実践的でダイナミックな学びを期待して参加しています。

H24年からは、地域の保育所 KEYAKIDS と連携して行っています。ワークショップの企画は、私と園長で「ふみふみ版画」に決めました。当日の仕事は、両者が協働して行うので、学生は保育士から自然と実践的な力を吸収することができました。アートパーク後の感想は、両者とも一緒に活動が行えた喜びと、何より子どもたちの笑顔でした。

この思いが実施後のボランティア活動につながり、保育所に出かけて「ライトドローイング」を行いました。H25年は、高木保育士の「大人も入れるような大きなお菓子の家！」という提案から「おかしな家」が生まれました。ダンボールで家を組み立て、参加者がお菓子の空き箱などで作品を作って家を飾っていく企画でした。学生も賛同して準備段階から積極的に活動を行い、子どもたちも大学に来て色塗りのお手伝いをしたり、活発な連携ができるようになりました。実施後のワークショップも、学生が企画して「ニュースペーパー in ダンボール」「クリスマスの飾りを作ろう」を行いました。

H26年は、さらに、松戸まちづくり会議とも連携して「まつど Atelier」「まつど Museum」を行いました。「まつど Atelier」では、子どもが指で絵を描き、それに額縁を作って「まつど Museum」に展示する企画です。地域の方々が、Museum カフェで焼きそばや飲み物を提供してくださいました。更に広がる地域連携の中で、学生たちが実践的に学べるような環境は松戸市ならではの事であり、地域の皆さんに感謝したいと思います。

最後に、26年のアートパークは、保育科永井先生の参加により、II部生が「木っと、ともだち！」で有志参加し、彼女たちの力を生かした地域貢献ができたことも意義のある出来事でした。今後の活動の発展を考えると、毎年楽しみなアートパークです。

短期大学部保育科 専任講師 北沢昌代

①「おかしな家」制作風景。子どもたちが事前制作のお手伝い。(2013) ②「まつど Atelier」受付は保育園の子どもたちが担当。(2014) ③「ふみふみはんが」BGMは保育士が演奏。(2012) ④「ニュースペーパー in ダンボール」学生が考えたゲームを子どもたちと行った。(2013)。⑤保育士とアートパーク後の記念撮影。(2014)



アートパーク 学生の感想

大成ゼミ



■「アートパーク7」お疲れ様でした。改めて思い返すと、とても大きな作品を4月にゼミで出会ってから数ヶ月のうちに皆で作り上げられたことは凄いことだと思いました。ある日の思いつきの「きのこのロボット」という単語からここまで来られるとは思っていませんでした。私は頭の笠をメインに制作していましたが、思うように立体にするのは難しく曲線の部分の表し方や強度などに悩まされました。それほどまでにこだわった部分だったので、完成してスプレーを掛けた時の達成感は感慨深いものがありました。パーツ毎に別れて作業していた他のゼミ生達も、それぞれ試行錯誤しながら「かっこいい!」「すごい!」と思えるようなパーツを作ってくれていたのも、毎週わくわくしながら作業をしていました。

当日はロボットの映えるカラッとした天気の中、たくさん子どもたちが参加してくれました。まさか段ボールがあんなにアスレチックのような組み立てになるとは、ゼミ生全員予想していませんでした! (笑)。色塗りも皆楽しんでいて、親子・兄弟・友達・その場でできた友達…沢山のふれあいが生まれる活動でした。時間がたつにつれ私達ゼミ生のTシャツも子ども達のキャンバスになっていきました… (笑)。

普段このように「全身で絵の具を使う」機会はありません。でも、アートパークでは大人も子どもも芸術性を発揮してグチャグチャになりながら楽しみました。こういった経験が「他の活動にも繋がるのかな?」とか、「造形への刺激になるのかな」とかいろいろ考えました。お昼を食べながら見た、「きのこのロボット」のちょっとセンチメンタルな背中では忘れられません。

児童学科保育士養成コース3年 中坂綾香

■アートパーク当日は、とても暑く過酷でしたが、充実した一日になりました。どのような形のものを作るのか、どのような色で塗っていくのか、全てが自由だったので正直、最初は戸惑いました。しかし、参加してくれた子どもたちと沢山会話をし、子どもたちの「こうしてみたい」とい

う思いを協力して実現しようとしていたら、いつの間にか「きのこのロボット」の回りに立派な秘密基地のような迷路ができあがっていました。

絵の具を使うようになってからは、水汲みの作業も交代で行いました。たくさん子どもたちが遊びに来てくれたので、刷毛を洗うための水がすぐに真っ黒になってしまい何度も交換に行きました。しかし、そのおかげで、地域の方と多くの交流を持つことができました。汚れた水を捨てて新しい水をためて頂いたり、絵の具で汚れた子をプールで洗って頂きました。また、私たちが子どもたちと一緒に絵の具まみれになっている様子を見て、「大変だね」と声を掛けて下さったり、重たい水の箱を運んで頂いたりしました。アートパークは、学生や先生、地域の子もたちだけでなく、地域の方々の多くの支えがあって成立しているのだということを強く感じました。絵の具でぐちゃぐちゃになると、子どもに戻ったようでとても楽しかったです。この体験を忘れずに今後の活動に活かしていけるようにしたいと思います。

児童学科幼稚園教員養成コース3年 阿部海音

■私は今回初めてアートパークに参加しました。大成ゼミは、「ぐるっとタワー」という段ボール製の『太陽の塔』を建て、その回りを螺旋状に囲んだ巨大オブジェを作りました。アートパーク当日は、タワーの回りを子どもたちと組み立て、色を塗ることが主な活動でした。色を塗るために沢山のゆび絵具を用意しました。子どもたちは初め、手を使って塗ることに抵抗があったようで、私たちが「お手で塗っても良いんだよ」と声をかけると、子どもたちからは「よこれちゃう!」という声が聞こえました。そこで、私は自ら自分の両手に絵の具をつけて段ボールを塗ったり、手形をつけたりしてみました。その様子子どもたちは初めは唖然とした表情で見えていました。しかし、私が子どもに帰ったように楽しんでやっていると、その姿が子どもたちにも伝染したのか、「僕もやりたい」「私もいれて」という声が聞こえてきて、嬉しくなりました。大人が子ど





もたちと何かを作ったり、遊んだりする時は、大人自身が大いに楽しむことも大切なかもしれないと感じました。

子どもたちは一見、色を塗っているだけの活動に見える中でも、いろいろなものに興味を持ったり、様々な発見を楽しんだりしていました。また、私の思いつかない事を教えてくれたりと、子どもの目線になって遊んでみることで自分の視野も広がったように感じました。

今回のアートパークは、多くの子どもたちや、地域の方々と関わることができ貴重な機会となりました。大学から公園まで荷物を運んでいただいたり、私たち学生だけでは不十分な点を補っていただいたりと、普段は感じることでできない地域の方々の優しさやあたたかさを感じることができたアートパークでした。

児童学科保育士養成コース3年 牧山珠果
(現・幼稚園教諭)

■炎天下のなか、アートパークお疲れさまでした。

ぴかっ！と晴れてよかったのですが、かなり暑くて大変でした(笑)

アートパークに参加して、一番印象に残ったのは、絵の具で思いっきり遊ぶ子どもたちの満足げな笑顔でした。普段、こんなに絵の具をさわる機会もなければ、汚れる機会も少ない中で、子どもたちは思いっきり絵の具で遊ぶ事を楽しんでいるように思えました。また、子どもたちの前に絵の具を出すと、まず最初に子どもたちはパレットの中の絵の具をぐるぐる全部混ぜるのですね。大人のように「きれいに塗ろう」という意識ではなく、そこに出された絵の具自体に興味をもち、混ぜたときの絵の具の感触や色の変化を楽しんでいるように思えました。そんな無意識感から、ピカソのようなアート作品が生まれるのかな〜？と考えたりしました。

人に絵の具を塗る、というのも普段できないことなので、子どもたちに「お姉さんたちにもぬっていいよ！」などと声をかけるとニッ！っと笑って楽しそうに絵の具を塗ってくるのが印象的でした(笑)

最後、「ピカソチック」が素敵にできあがってよかった

です。同時に私たち自身も真の「ピカソちゃん」になっていました(笑)。1日アートパークに参加して、子どもたちと思いっきり絵の具まみれになって遊び、その中で沢山の発見をすることができました。とても楽しく、勉強になった1日でした。

アートパークのような子どもたちが汚れることを気にせず、思いっきり遊べるイベントが地域にあるということはとても素敵な事だと感じました。今回の経験を今後につなげていけたらと思います。素敵な時間をありがとうございました。

児童学科幼稚園教員養成コース3年 佐藤希恵
(現・公立保育士)

■最初は教室で先に作っていたマツドンの頭が満足のいくでなかったで、当日、バランス良くかつこいい身体が出来るかすごく心配した。しかし、作っていくうちにそれらしくなってき、みんなが頭に思い描いていた「マツドン」が姿を現しとても感動した。いつまでも公園に置いておきたいくらい立派に出来て本当に嬉しかった。

マツドンを作る過程で、発想だったり、人と人との繋がりがったり、様々なものが生まれてくるように感じた。子ども達の自由な発想は見ていて衝撃を受けたし、大学とは異なった場所で自分が主体的に活動出来たことにも少し驚いた。発見や学びもたくさんあったが、何よりも自分が楽しめたことが良かったと思う。

児童学科保育士養成コース3年 木村智美
(現・公立保育士)

①大学から公園までの運搬は地域の応援無くしては成り立たない。「クリエイティブまつど工房」がトラックで運搬。②「松戸まちづくり会議」は焼きそばで応援。③地域、行政、大学事務局、4年生お助け隊が全体のサポートを行う。④恒例の子どもを洗うプール。地域と4年生が協力して行う。⑤毎年、4月から開かれる企画会議。学生、教員、地域、行政、大学事務局が意見交換を行い、アートパークの企画が練られる。



アートパーク 座談会

今までとこれから

2015・2・23

出席者

- O. 大成哲雄（聖徳大学 児童学科 准教授）
K. 北沢昌代（聖徳大学短期大学部 保育科 専任講師）
U. 白井薫（松戸市 文化観光課）
T. 高木優里（KEYAKIDS 園長 保育士）

O「今日は、お忙しい中お集りいただきありがとうございます。今日は、アートパークの今までを振り返りつつ、これからのアートパーク、松戸のアートについてお話ができればと思います」

U「アートパークは最初はどういう感じで始まったんですか？」

O「元々は文科省の社会連携事業として始まり、学生と地域が交流し学生の社会参画力育成が目的です。その頃は、地域に学生を出そうって意識はあまりなく、『助成金をとったから、さあやろう』って感じで始まった感じです。継続しているプログラムも無かった」

U「僕もその頃マップとか一緒に作ってましたね…高木さんが（聖徳の）学生の頃は学外に出るような活動はありましたか？」

T「あまりないですね。やってません」

O「調度、過渡期だと思う。今だってアートパークの事知らない学生はいる（笑）」

U「そうなんですか?!」

K「学生はどんどん入れ変わっていくからね」

U「千葉大で話した時も、学生がアートパークのこと全然知らなくて…授業で松戸中央公園のことを調度考えていて、色々コンテンツも考えてるんですけどこんなのやりたい…っていうのが、まさしくアートパークで。もう聖徳がやってるよ!って（笑）」

O「だったら一緒にやってもいいですよ!?!…」

…授業（ゼミ）で考えた事を学外で実践していくスタイルも今まであまりなかった」

U「COC『地（知）の拠点整備事業』のはしりですよ」

O「そうですね今風に言えば COC ですね。準備はアクティブラーニング。サービ斯拉ーニングでもある（笑）」

U「COC って今迄のことがベースにあったから、生きてると思います…でも、どうして公園だったんですか？」

O「元々、子どもがあまり公園で遊んでないし…大学から一番身近なはずの地域が松戸中央公園なのに誰も目が向いてなかった。だから地域活動を行っていくのに格好の場所（穴場）なのかなと思ったし、児童学を学んでいる児童学科としては、公園に着目したらなにか見えてくるものがあるんじゃないかって」



U「保育の現場に出たら公園での遊びとか考えなきゃいけないですもんね。親子関係等色々あるだろうし、少し前だと公園デビューとか…」

O「そうですね。アートパークは様々な分野の人に集まってもらって子どもや公園といったことを一緒に考えられる場であってほしい。『外で思いっきり遊ぶのって大切だよ』といったメッセージは発信し続けていると思う」

K「先生たちも楽しんでますよね!（笑）」

U「学生も先生も地域も一緒に楽しんでやっている。そういうところが続いている理由の一つかもしれませんね」

U「KEYAKIDS さんと一緒にやってどうですか？」

K「最初は私の所属が保育科だから、学生も得るものが多いかなと思って…でもやっぱり保育士は忙しいだろうと思って、お互い遠慮している時期があった。でも、やっていく中で、当時園長だった石川さんからアイデアが色々出てきて、それがすごく面白くて…石川さんたちにも、私や学生たちとやることで得るものがあったんじゃないかと思う。お互い言い合える人間関係を築くまでにはやっぱり時間がかかりました。私もケヤキッズにあまり行く機会がなかったから、日常生活の事とかもわからなくて意見も言えなかったし。でも色々な機会で行き来するようになってからは、『あ! KEYAKIDS ってこんな事やってたのね』とか『こんな子どもがいるのね』とかそんなところから、お互い言いたいことが言えるようになったと思いますね」

U「回数を重ねながらですね」

K「でも、保育士さんのお手伝いを学生がする形になってしまうと学生のモチベーションも下がってしまうから、『自分たちもやっているんだ!』という意識を持たせることは大切だと思います」

O「学生が主体的に関わる。それは絶対大事ですね。アートパークに関わる学生が単なる『お手伝い』になっちゃうと、やる意味が薄れる。実習や補助のボランティアとも違う。アートパークは子どものためにやっているように見えるけれども学生のためでもあるし、地域のためでもある…当日そこに関わる全ての人のためでもあると思う」

K「教員のためでもありますけどね!（笑）」

O「そうそう! 教員のためでもある!（笑）それぞれが対

等に関われる場である事が大事。アートはそこを繋ぐものとも言える」

K「先日の『松戸まちづくり会議』の発表でも、時間はかかるけれども、みんなで話し合っただけで進めていくことが大事だったって事になりましたよね」

U「今回、まちづくり会議でも、アートパークで『お休み処』を作ることがすごく良かったなと思って。まちづくり会議だけだったら焼きそば作るだけで終わるんですけども（笑）北沢先生とケヤキッズさんと一緒にカフェのような空間を作るコラボができた。他の団体と繋がることで新たな展開が生まれた」

O「4 回目頃から更に『連携』とはどういう事なのか考えだして、単に会議に出席するとか、提携を結ぶとか（笑）そういうことじゃなくて、いわゆる『協働』だと思うんですが、一緒にやるってことで何が生まれるか…アートパーク5では、意識的に学内と地域団体がコンビを組んで企画、実施しましたね」

一同「うんうん」

U「空間の使い方では連携するっていうのもすごく新鮮で自然な形だと思いました」

O「7回の中でそういった地域との連携の方法も模索してきました。あと、面白いのが聖徳大学には様々な専門科目の先生がいて、幼児教育という大枠だと科目の違う先生ともつながれる」

U「4大と短大と一緒にやってたりとか。中々ないですね」

O「我々のような美術教育や家庭科、音楽が入っていたり…柴山先生の教育学はレジジョ・エミリアのアトリエスタとペタゴジスタみたいな感じになれば面白いかなって思っていました…」

K「今回は子どもに運営をやってほしい！って私の前々からの強い思いがあり（笑）受付をやってもらったんですけど、もっと子どもが運営したら面白いと思います」

O「これからのヒントになる内容ですね…」

K「あとはそのためには学生たちがどうサポートしていくか…イメージはあったんだけど、どの程度までできたかは分からない」

O「ある意味実験できるところがアートパーク。事故はだめだけど、失敗しても大丈夫っていう感じがあるのも強みかなって（笑）これだけいろいろなグループがいるから、企画が失敗してもカバーしあえるし…。ハーモニーのカプラは毎回、絶対子どもたちがいて恒例になっている。記録集作っているとよくわかるけど年々空間の生かし方等グレードアップしてる（笑）」

O「最近是一年かけてずっと地域の諸団体とつながってるというのが面白いですね。アートパークが終わったら終わりではなく…。保育科有志や私のゼミの『つながる洋服』『きのこロボット』がいい例です」

U「盆踊りでもきのこロボット出てきちゃいましたからね。アートパークで終わりではなく。続いているのが面白いです」

K「この前のCOCのシンポジウムでアートパークのことも盆踊りのことも、色々なところから話し出てきましたね（笑）地域の人が語ってくれたのが良かった」

O「やってる本人は良いと思ってやっているけど、外（地域）から良いつて言ってもらえると嬉しい」

O「高木さんはアートパークは何回やりましたっけ？」

T「3 回やりましたね。いつも思うのは、保育所だけではできないことだし園生活の中では絶対出会えないお姉さんたちと関わりを持つこともできるし、毎年変わるワークショップの内容に子どもたちも刺激を受けていつまでも覚えてるし…松戸中央公園に行けば『アートパークのところだよ』『きのこロボットいたよ』って言うてる子どもがいて、私はそれがすごく嬉しいですね」

O「やっぱり子どもたちには公園での体験を覚えてほしいし、中央公園にも愛着を持って欲しい」

K「6のあと、柴山先生が『アートパークの形はこれで完成したんだ！』って言ったことがあったじゃないですか。今までできなかったことが段々できてくるようになった。あと、生涯教育文化学科が『おしごとデパート』で抜けたことで『自分たちでやらなきゃいけない』っていうことになって、考え方の変化や高い意識が生まれてきたかもしれない。今までは生涯学習が届け出等をやってくれて、我々はワークショップのことを考えていればよかったけれども、全体を考えなくてはいけないことになった」

O「今思うと、それはそれでよかったのかもしれないですね。（笑）初期メンバーの齊藤先生や神谷先生にはノウハウを作っていただいた等改めて感謝です。今までは『全体を動かす人』『部分を動かす人』という形だったけど、両方やることになって全体のモチベーションがあがった」

K「今年度はそこがもっと充実して、まちづくり会議とのつながりも深まりました。今回うまく行っちゃったから、『次回からどうしようー？』って思って（笑）」

U「6で形ができて、それを踏襲する形で7が行われた」

K「もう同じのはダメ！（笑）」

O「一応この形は3回目にはできていた」

K「やりたい人でやろうってなったのが3回目からですよ。次はどういう風になっていくんだろう？」

O「一見毎年同じようなことをやっているように見えるかもしれないけれども、徐々にアップしている。みんないいものを作ろうっていう意識があるから、3年くらいやっていると内容に磨きがかかってくる！『まつどのコックさん』は親子で楽しむ方法をうまく提案することになったし」

K「あと榎本さん、青山さんの『クリエイティブまつど工房』。運搬等、地域の方々の協力なしでは絶対にできない」

O「行政も一緒じゃないとできない。広報でも随分お世話になりました。行政的な立場から見てどうですか？」

U「やっぱり『まちづくり』の視点から見てしまうんですけども、中央公園は遊具もありますが自然も多く残されていて遊びがいがあるというか使い方の発想が生まれやすく…一般的な公園らしくないところが良いと思います。これが西口公園だったらやれることも限られてきます。中央公園だから多様なことができるのだと思いますね」

O「それこそ永井先生の『木っと、ともだち！』みたいなアプローチが出てきたのも頷ける」

K「千葉大の木下先生の『公園大改造』の授業内容をもう少し聞きたいです」

U「千葉大学さんも問題意識を持っていて、プランニングはできるんですけども、実践はあまりできていないというか…。それで今回、屋台を作って盆踊りでやってみました。また、プラーレ自体ももう40年くらいたつので、建

て替えの時期が来るんですよ。その時にどう駅からのアプローチを変えていくか…そういうのを考えているんですよ、彼らは」

O「私も今、河川清流課と新しい坂川親水公園をどうするかを考えています」

U「市のほうも『あれダメ』『これダメ』だけじゃなくて…住民と一緒に使い方を考えていく」

O「完全なものを提供するのではなく使う人に考える余地を残したデザインが理想です」

K「住民の生活は税金で勝手に作られていく時代は終わっただけでしょうね」

U「公園も今、みんな民間に委託してるんですよ。大久保公園もそうなんですけれども、公園でどう収益を上げてどう運用するかを考えている。もしかしたら将来中央公園にもカフェとか立てて、その収益で公園整備をしたり、アートパークの運営に充てたりする事ができるかもしれない」

O「そういう仕組みができれば素晴らしいですね」

U「実際、盆踊りの時は、広場に屋台を立てて、収益の出た分は公園に還そうよっていうことでやりました。アートパークってそういうのを考えるきっかけにもなっていると思います。今、まちづくり会議で地域の人たちがやりたいって言ってるのが『ビアガーデン』（笑）」

一同「おー（笑）」

O「『酔いどれ祭り』がなくなっちゃいましたからね（笑）面白い展開になりそうですね…マルシェは？」

U「今までの延長線上と考えればできるかなと思います」

K「じゃあ授業で作った段ボール遊具は捨てずにとっておこうかなー（笑）」

一同「（笑）」

O「アートパークも年々リピーターが増えてきて、参加者も楽しみ方を自分たちで模索してきてますね」

U「一つのフェスみたいになってきてますね」

O「最初からそうだけど、こちらが一方的に与えていくだけじゃなくて一緒に作っていく姿勢が大事」

K「どこまでをどうサービスしていくかが難しいところですよ」

U「地域を運営サイドにどう巻き込んでいくかもポイントだと思います。地域の小学校のPTAのお母さんたちにも企画に参加してもらおうとか…」

O「そういうのもいいですね。そのはしりが青木さんたちのグループ『じゅんぴしつ』ですね」

K「重要なのは『やりたい！』っていう意欲だと思う」

U「意欲を持った市民ですよ。でも、実際今動いているメンバーの数が適切というか、参加者や団体もこれ以上増えると大変ですね（笑）」

K「学生スタッフだけでも100人越えちゃうから……」

O「これから人数ではなく質だね。それこそ千葉大と一緒にやってもいいし、それも新たな展開かな、と」

U「彼らもすごいアイデア持ってますしね。ただ千葉大はそれを地域で披露する場があまりないようなんです」

K「アートパークを見ていると子どもと関わるのはやはり聖徳の学生はうまい！」

O「普段の学修が生きている。保護者からの評判もアンケートを見ると凄く高い」

K「例えば千葉大が入ってきたら子どもとの関わり方を聖徳の学生から学んでもらったりして…聖徳の学生たちも千葉大の学生から、空間づくり等のアイデアを学ぶ、そういう風になるといいんじゃないかな。」

O「やっぱりいろんな人と組むと楽しいし、お互い勉強になる。同じ松戸だし」

O「最近卒業生も手伝いに来てくれる。これも凄くいいなと思って。学生の時もやったけど、卒業して現場の先生になってからも自主的に参加している。学生と一緒に作ったりとか、子どもの接し方には慣れてるから在学生の見本にもなる（笑）当日は忙しいのであまりゆっくり話せないけど、研究室に『私はあの絵具の配り方は反対です！』とか結構辛口のメモを残してくれたり（笑）どこかで後輩を思いやってる感じも悪くない」

U「それだけ思い入れがあるんですね」

O「最近はそのいった縦横のつながりも生まれている気がしますね」

U「子どもたちもそうですね、最初に経験した子たちはもう中学・高校生になっているかもしれない」

O「そうですね その子たちが聖徳の学生になってアートパーク企画する側になったら凄いですね」

K「アートパークのタイトルの『アートという部分が高尚に感じる』っておっしゃる方もいるんですよ。私はやっぱりアートは体験してもらわないとわからないものだとずっと思っています」

U「アートを身近に感じられない人が多いと思います」

K「大人はやはりどこかで、非日常であるアートを受け入れるために切り替えをしなくちゃいけない。体感して理解して貰うためには続けていくことが重要だと思います」

O「アートパークは学生と子どもが楽しく遊んでいるんだけど、その様子を意識的に見せてもいる」

K「最初は子どもにと思ってやってたけど、最近子どもを通して大人にもっていう意識が加わってきてるかな」

O「公開ドキュメントです。出来た作品うんぬんではなく過程を見せていく。大人（保護者）には子どもの表情とか楽しんでいる姿を見てほしい。出来れば一緒にやって欲しい。保護者はその姿見て結構驚いている。うちの子がアートしている時はこんな表情するんだって」

K「大人（だけ）のアートパークもやりますか？！」

T「いいですね！！」

K「そうしたらその企画では私たちはお手伝いする形で、中心は『まちづくり会議』で計画していただいて…（笑）」

U「ビアガーデンになるかもしれないですよ（笑）」

O「持ちつ持たれつというか、いい意味で共同体になればいいですよ。それが最終的に『暮らしの芸術都市』として繋がってくる。そういった意識の高まりが松戸市には徐々に生まれてきている気がします。本日はありがとうございました！！」



「アートパークの記録 2008～2014
／聖徳大学大成ゼミの記録 2010～2014」

企画・編集・デザイン 大成哲雄

印刷 株式会社シッブス

執筆協力 北沢昌代 野上遊夏 高木優里

協力 白井薫 中坂綾香

発行日 2015年3月31日

■編集後記

アートパークと大成ゼミの活動を振り返ってみましたが、地域の協力なしでは実現しなかったものばかりであったことに改めて気づかされました。関わって頂いた多くの方々に、この場を借りてお礼申し上げます。学生も忙しい中よく頑張りました。

今回、様々な意見を載せてプロジェクトを立体的に記録したいと思いましたが、読み返すと少々偏った表現になってしまったかもしれません…。限られたページ数ということもあり表現しきれなかった点はお許し下さい。

アートパークは不思議な事に今迄に一度も雨天中止、順延になったことがありません。どうやら天気も見方をしてきているようです。これからも松戸で様々な活動を実施していきたいと思っています。松戸をアートで面白くしたいと思っている皆様方、次の活動でお会い出来る日を楽しみにしております。 大成哲雄

※各活動の詳しいドキュメントはこちらをご覧ください。

「アートパーク プロジェクト」

<http://artpark.exblog.jp/>

「せいとくアートランダム」

<http://seitokubi.exblog.jp/>

松戸のアートを楽しむ!!

「西口公園プロジェクト」

アーティストの内海昭子らが企画。西口公園にクレーンを
持ち込み、大量のスズランテープで非日常的な空間を作った。
人々の反応も含めたアート。色、風、音などを五感で楽しんだ。
(暮らしの芸術都市 松戸アートラインプロジェクト 2012)



①松戸まちづくり会議が主催し、中央公園で
大規模な「松戸ラストサマー盆踊り」を開催。
「きのこロボット」のまわりで市民と踊った。
(2014) ②西口公園 (2012) ③「NEW MAD
PARADIS」で「つながる洋服」を展示 (2015)
④レジデンスで滞在中のアーティスト、マッ
ト・シェリダン。街中に映像を投影した。(2015)

「暮らしの芸術都市」は、暮らしや
生きて行く事といった、私たちみんなが
日常的に行っている生活の営みを芸術
(アート) として捉え直し、多様な住民
の手によるまちづくりに取り組んで行こ
うという試みである。

松戸は今、アートによって少しずつ進
化している。「お米屋さんプロジェクト」
で使った旧米店は今では、アーティス
トのアトリエ村になり、閉じたホテルは、
国内外からアーティストが訪れ、滞在制
作を行うレジデンスのシステム
(PARADISE AIR) が整ってきた。今年は、
世界65カ国から253通の応募があり2名が
選出された。また、根本壁画通りをはじ
め、街中にはアーティストの描いた壁画
が徐々に増え、松戸の景観もアートな街
として変わってきた。

学生は、ゼミで企画したプロジェクト
以外にも、アーティストやまちづくりの
企画に参加し、様々な人々と交流を持ち
ながらアートを楽しんでいる。(大成)

■松戸のアートを楽しむ!

坂川親水広場ワークショップ

松戸市河川清流課
聖徳大学大成ゼミ

さがわ【坂川】

千葉県を流れる江戸川水系の1級河川。松戸市、流山市、市川市の3市を流れ全長16km。今から40年程前は日本で一番汚れた河川として報道されたこともある。近年は浄化作業がすすみメダカや鮎などが泳ぐ程の清流に戻った。

①模型を作りながら理想の広場のイメージを形にした。2014年秋から4回ワークショップを実施。②現在の坂川親水広場の様子。かつては水遊びができるなど、市民に頻繁に利用されていたが、近年は老朽化に伴い利用者は減っている。③毎回、グループで話し合われた内容を学生と地域住民が発表。④広場の視察後、公園の今、課題を確認。⑤動物の足跡の形の池。グーグルマップで探すと足跡だと分かるなど、ユニークな発想が多数出た。⑥広場までの橋。



「坂川親水広場ワークショップ」

坂川は松戸の街中を流れ、昔から市民に親しまれている川である。中心から少し離れた郊外、矢切地区に今回開く「坂川親水広場」がある。この広場（公園）の老朽化に伴い、行政、地域住民、学生、コンサルタントがグループになり、4回のワークショップでリニューアル案を考えた。最初は、現地視察を行い、広場の印象を話し合った。2回目は、市民が訪れたくなる広場について意見交換を行った。時には子ども目線になってみたり、保護者の体験談、シニア層からは朝夕の散歩道であるため「健康」をキーワードにあげるなど、様々な意見がでた。3回目は理想の広場を模型で作りプレゼンを行った。最後はまとめを行い、これまでに出的意見をもとに新しい坂川親水広場が計画されることになった。

水や自然に親しめ、子どもからお年寄りまで、利用者が工夫して楽しめる広場。矢切の象徴の田舟が使われる等随所に遊び心がある広場になる予定である。（大成）





鑑賞活動 実施校

2010 年

- ・松戸市立 松戸第4中学校（2月2日）
- ・松戸市立 新松戸南中学校（2月17日）④

2011 年

- ・松戸市立 松戸第4中学校（2月4日）⑤
- ・柏市立 柏第3中学校（2月8日）
- ・松戸市立 新松戸南中学校（2月16日）

2012 年

- ・柏市立 大津ヶ丘中学校（11月16日）
（千葉県教育研究会 造形教育部会研究発表会）
- ・保育園 KEYAKIDS（2月7日）
- ・松戸市立 松戸第4中学校（2月10日）

2013 年

- ・松戸市立 松戸第4中学校（1月25日）②
- ・松戸市立 旭町中学校（2月5日）③⑨
- ・保育園 KEYAKIDS（2月7日）

2014 年

- ・松戸市立 六実中学校（1月24日）⑧
- ・保育園 KEYAKIDS（2月4日）①⑦⑩
- ・松戸市立 松戸第4中学校（2月7日）⑫

2015 年

- ・松戸市立 和名谷中学校（1月27、28日）⑥⑪



（児童学科小学校教員養成コース3年
保江香緒莉 現・小学校教諭）

普段、小学生と関わることはありませんが、中学生と触れ合う機会はなかなかいたため、今回、とても貴重な体験ができたと感じています。松戸四中の先生方、生徒のみなさん、ありがとうございました！また来年、機会があつたら是非参加したいと思っています！

鑑賞活動や自分の行った鑑賞活動を通して感じる事ができました。活動終了後の反省会では多くの反省点ができましたが、私は参加した生徒（中学生）がどう感じたのかが一番重要ではないかと思いました。学生（大学生）の満足度も重要なことですが、わざわざ通常の学習時間（総合学習）を頂いて行った以上、生徒の中に何を残すことができたかがポイントではないかと思っています。中学生の鑑賞シートに書かれた感想も見てみたいと思います。学生として、反省点は考えれば考えるほど出てくるのですが、それを上回るほどすごく楽しい体験ができました。

鑑賞活動



①



④



③



②



⑥



⑤

聖徳大学大成ゼミ
武蔵野美術大学「旅するムサビプロジェクト」

対話型鑑賞の活動

5年前から武蔵野美術大学の活動「旅するムサビプロジェクト（旅ムサ）」と鑑賞活動を行っている。旅ムサの千葉ルートとして毎年、松戸市内の中学校と保育園で対話型鑑賞をやらせていただいている。ムサ美生の作品と聖徳からは4年生が卒業制作を持って行き、それぞれの作品をファシリテーターが担当する。また、聖徳の4年生の作品を3年生が担当することもあり、学内とはひと味違った異学年交流も生まれている。

この活動に集まってくる学生は将来教職を目指す学生が殆どである、他大学との交流はお互い刺激になる。東京家政大学、文教大学が参加する回もあった。これからは大学の枠を超えたコラボレーションが新しい教育の形を産む予感がある。参加した学生は、ファシリテーションの難しさと同時に、鑑賞することの楽しさを学んでいる。
(大成)

鑑賞活動を終えて…

一作品10分という短い時間ではありましたが、その中でも一つの作品をよく見ること、沢山のことが見えてくる。一から多くの事を発見する楽しさを中学生に感じて貰えたのではないかと思います。今回、作者・ファシリテーター、両方体験した身としては、一番「間」の大切さを学んだ一日でした。沈黙という時間は決して無駄な時間ではなく、考える時間として重要な時間である事を他の学生の



「KINOKO ROBOT THE MOVIE」 (2分55秒)

れをつけたい！」や「こうしたい！」という思いや、イラストを手がかりにし、学生さんが試行錯誤しながら実現してくれました。当日のファッションショーでは、ランウェイを子どもたちと学生さんがモデルになりきってウォーキングをし、普段とはまた違った表情をしていた子どもたち。とても誇らしげで、達成感に満ち溢れていました。

「きのこロボット ザ・ムービー」では、映画を作る仕組みやそれぞれの役割があることの楽しさや喜びを子どもたちなりに感じていたようです。撮影場所には普段子どもたちが遊んでいる公園や土手、そして秘密基地など慣れ親しんだ場所を選びました。撮影場所に着くと子どもたちは、大成先生や学生さんに、それぞれの場所の紹介を矢継ぎ早にしていました。子どもたちはどの場所にも愛着を持っています。地域の中に保育園があり、その中で育っていく子どもたち。今の時代様々ながことが言われていますが、地域に発信するアートを通して子どもたちのことを知ってもらい、見守ってくれる地域であってほしいと願っています。

最後に、保育園内だけに留まらず大成ゼミと協力してアートプロジェクトを実行することで、子どもたちはとても沢山の刺激を受け、園生活だけでは触れ合うことのできない年齢の方々と様々な関わりを持つことができました。協力しなければ絶対にできなかった貴重な活動、経験であったと思っています。

本当にありがとうございました。

(ケヤキッズ園長・保育士 高木優里
児童学科小幼コース卒業)



①架空の映画「きのこロボット THE MOVIE」ポスター。
②初回はグループに分かれてジェスチャーゲームをし、交流を深めた。③3枚の「きのこロボット」の写真からお話しをグループで考えた。発表の様子。④映画に出てくる乗り物や衣装を考え、お絵描きをした。後日、絵をもとに空き箱で工作をし、本編では街中に合成し飛ばした(写真⑨)。
⑤松戸中央公園での撮影。撮影は学生が、一眼レフカメラのムービー機能を使って行った。⑥江戸川河川敷での撮影。今日の配役発表。⑦編集風景。⑧完成作品は松戸駅前の二つのデジタルサイネージ(屋外モニター)で上映された。

きのこロボット THE MOVIE

KINOKO ROBOT THE MOVIE

聖徳大学大成ゼミ+KEYAKIDS

暮らしの芸術都市 2014

■ 架空の特撮映画の予告編を作る。

今回のプロジェクトは、本編の存在しない、予告編という形のショートムービーを学生とKEYAKIDSの子どもたちで作る活動である。「アートパーク7」で作った「きのこロボット」が今度は松戸を舞台にした架空の特撮映画に登場する。突然、巨大な「きのこロボット」が街中に現れ、学生と子どもたちが立ち向かうというのが大筋である。子どもたちとは、お話を考えたり、劇中に出てくる乗り物を考えたり、毎週小さなワークショップを行った。今回のプロジェクトのねらいは、カメラのファインダーやムービーを通して地域や友人、子どもたちの魅力を新たに発見する事である。

頭がきのこの「きのこロボット」は自然とテクノロジーを合わせ持った現代に突如現れた「大いなるもの(存在)」である。自然災害や原発問題等、「きのこロボット」に重ね合わせて見てみると意外と本編は深いかもしれない(?)。鑑賞者は、予告編からそれぞれの「きのこロボット」のストーリーを思い描くのである。

出来た作品は、松戸駅前の屋外モニターで約2ヶ月間放映され、保育士さんの考えた台詞を話す子どもたちが熱演だと好評だった。

(大成)

■ 二つのプロジェクトを終えて...

「暮らしの芸術都市」にKEYAKIDSの年中長児を中心に大成ゼミと「つながる洋服」、「きのこロボット ザ・ムービー」で2回参加させていただきました。

「つながる洋服」では、洋服のどこが必ず繋がっていないといけない、という面白い縛りの中で、子どもたちの「二つに



- ①保育士を交えて会議。②イメージワードを手がかりにグループ分け。
- ③保護者、学生から集めた古着で作品を作っていく。④活動の様子 遊びながらイメージを共有し制作して行く。
- ⑤ショーの開催決定。⑥ショーの入場門は学生が運搬用コンテナにレインコートを巻いてライトアップし演出した。
- ⑦音響・庄子渉、照明・森純平 地域のアーティストが担当。
- ⑧つながる洋服ファッションショーの様子 約25分のショーを行った。

「つながる洋服」を終えて…

「つながる洋服」を作ると先生から話を聞いたとき、初めはどのようなものになっていくのか想像もつかず、作る目的を見出すのに時間がかかりました。今回は、幼児たちと一緒に活動をするということもあり、自分の中に明確な目的が見つかっていない状態で「どうはじめていけば良いのだろうか」と、悩みました。しかし、実際の幼児たちとの活動は、そんな葛藤を忘れてしまいうくらい楽しく、洋服という枠にしばられず、自由に布の上にボタンやリボン、綿やキラキラなスパンコールを置いては真剣な顔で、それでいてどこか楽しそうに作る姿を目の当たりにして、私はそれをどうにか形にしてあげたいという気持ちが強くなっていました。幼児たちがイメージしたものを私が形にして見せてみると、幼児たちの目がきらきらと輝き、どんどん新しいアイデアが加わっていく展開になりました。そして、活動を重ねていくうちにいつの間にか私と幼児の共同作品ができあがりました。

ショー当日の朝、最後の仕上げにミシンをかけているとき、「今日で最後なんだ」とふと思った瞬間、泣きそうになっている自分に気がきました。つながる洋服とは、ただ作るだけが目的ではなく、その過程で幼児と喜びや葛藤を共有し、信頼関係を築きながら「心がつながる洋服」を作っている活動だったんだと気づきました。そんな見えない気持ちが目で見える形として表れることがアートなのではないかと思いました。

(児童学科幼稚園教員養成コース3年 則竹 萌)

現・幼稚園教諭



つながる洋服プロジェクト

大成哲雄+KEYAKIDS+聖徳大学大成ゼミ
暮らしの芸術都市 2013



■「つながる洋服プロジェクト」

学生と子どもが時間をかけて、じっくりコミュニケーションをとりながらすすめて行くプロジェクトができないかかねてから考えていた。また、学生と子ども、保育士がコラボするどのような活動が生まれるか興味があった。筆者の授業で古新聞を使った題材「二人以上で着れる服」というのがある。新聞紙で服を作る題材はさして珍しいが、グループの中で最低二人以上は服のどこかがつながっていることを条件とすると、モデルが一人の時よりグループ内によりコミュニケーションが生まれることに気づいた。この題材をアレンジし、今回は古着を使って「つながる洋服」の活動ができないか考えた。学生と子どもが必ず服のどこかがつながっている服を作る事が条件である。

毎週、学生が保育園ケヤキッズに通い活動が始まった。ケヤキッズと長期的な活動を行うのは初めてであったが、普段から造形に力を入れている保育園なので子どもたちともすぐにうちとけた。最初は集めた古着で遊びながら活動をすすめて行った。活動が2、3回を過ぎた頃、「暮らしの芸術都市」の枠でプロジェクトを行うことが決定し、ダイエーの空きフロアでファッションショーを開催することになった。

「つながる洋服」を着こなすには学生と子どもがチームとして意思疎通がはかれないといけない。ショーに向けて決めポーズやウォーキングの練習を行い交流を深めながらチームになって行った。ショー当日は地域のアーティストが音響と照明で加わり、本格的なファッションショーができた。

(大成)



⑦



⑥



⑩



⑨



⑧



⑫



⑪

「101 人ライトドローイング」2012 年 12 月 8 日 松戸中央公園にて実施
「ぶらり途中下車の旅 新京成線」日本テレビ 2013 年 2 月 9 日放送

⑥冬の公園に光の花畑を作る。⑦公園までの階段。各自がハートを表現。同じ時間内でも3つ描く人がある。⑧参加者の年齢層は幅広い。⑨誘導灯の点滅機能を使い、ゆっくり回った軌跡。⑩マンションの公開空地で表現。自由演技。⑪「ぶらり途中下車（1）」、「きぼうのたから」でタレントの宮下純一と「ぴかぴか人間」を表現。⑫「ぶらり途中下車（2）」、松戸中央公園で活動。全くのノーブランドで15人程の学生とディスカッションをしながら制作。滑り台は学生3人で表現。中央の☆は宮下純一。

当日は、約90名の市民や学生が中央公園に集まり、予定していた12のプログラムを楽しんだ。最初は、基本形をマスターし、徐々に参加者と即興で作品を作っていた。できた作品は、HPからダウンロードできるようにした。当日は相当寒い夜だったが、子どもから大人までみんなが楽しめた活動になった。

その後、日本テレビの「ぶらり途中下車の旅」で活動が取り上げられ、保育園「きぼうのたから」で旅人と学生、幼児が共演し（写真⑪）、松戸中央公園では、旅人と学生がディスカッションをしながら遊具のある場所と関わって作品を作り上げた（写真⑫）。ライトドローイングの可能性は様々考えられるが、地域活動でも有効であった。参加者同士のコミュニケーション、場所と関わる活動、ライトの種類など、どこに重点を置くかで表現、活動が変わることが分かった。また、ファシリテーターの意向が強いかわかりませんが参加者の満足度にも差が出ることも分かった。

（大成）

101人ライトドローイング

大成哲雄+聖徳大学大成ゼミ

暮らしの芸術都市 松戸アートラインプロジェクト 2012



①「びかびか人間」。二人一組になって一人がポーズをとり、もう一人がその輪郭をライトでなぞる。②③中央公園にある花壇を全員で回ると花壇の形が光で浮かび上がる。③ライトドローイングのルール説明。参加者は懐中電灯、ペンライトを持参。④準備の様子。学生が写る範囲の確認。プロジェクターとスクリーン取り付け。本番では、撮り終える毎にスクリーンに写真が写り、参加者とできばえを確認出来る。⑤寒いので、全員でスクワットをする。人数分の光の線が生まれる。



夜の公園はひと気がなく暗いイメージがある。マンションの公開空地も同様である。そこで、ライトドローイングを地域住民と行いネガティブな夜の公園を一時的ではあるが、楽しい時間を共有できる場とし、公園の新たな活用方法を提案したいと考えた。ライトドローイングは古くはピカソ、最近ではトーチカが表現方法として用いている。また、教育現場や結婚式の余興など、方法自体は一般的になって来ており、より多くの人たちと表現出来れば楽しめると考えた。タイトルの101人は、100〓大勢、1は個人と訳す。中国の現代アーティスト、アイ・ウェイウェイがドクメンタ12で行った1001人の中国人をカッセルに連れて行くプロジェクトにヒントを得た。ライトドローイングは、大勢で行うが、一人一人が重要であることをタイトルに込めたかった。

松戸市のアートプロジェクト「松戸アートラインプロジェクト」の初回では、松戸駅周辺で川や公園、民間の空き店舗などを会場にして、多くのアーティストが制作、展示を行なった。「大成ゼミ」は「お米屋さんプロジェクト」を行った。2年目は「暮らしの芸術」をテーマに、現代アートに限らない日常性ある取り組みに焦点を当て「松戸百鬼夜行」を行った。3年目は「暮らしの芸術都市」を掲げ、地域住民が主体の運営体制のもと、まちづくりとアートが融合する街のあり方を追求した。地域の課題に眼を向け、アーティストがその解決策を地域と共に考えた。例えば、駅周辺には有効活用されていない場所がある。公園、公開空地、江戸川河川敷等があげられる。そこで、この年は松戸中央公園とそこに至るマンションの公開空地で活動を行うことになった。

ライトドローイングの活動



⑤



④



⑧



⑦



⑥

①「デコデコちゃりんこ〜団地探検隊〜」11月18日（日）常盤平団地ポール公園で実施。背景は星形住宅（スターハウス）。②「生きる力号」。大学であらかじめ制作。③材料箱。形や質感で大まかに分類。④学生の伴走で団地内を走った。⑤家族で協力して作った「ハッピークリスマス号」。コンセプトは、団地に幸せをふりまく自転車。⑥ケヤキ通り。初めて補助輪なしで乗る子どもを手伝う学生たち。三輪車もデコった。各々の速度で楽しんだ。⑦「カラフル自転車 ふたり乗り」⑧子どもたちは団地を何度もデコチャリで回った。

駅までの帰り道、普通の自転車に乗っている人を見るなり学生が「どうしてデコらない!？」。アートの自転車の方がスタンダードに感じる様になってしまった一日であった。

（大成）

常盤平団地は建物の間を結ぶ小道も魅力の一つにあげられる。うねうねと曲がった小道を自転車で行くのはスリルがあった。何周かした後、それぞれが作ったデコチャリ（全12台）を子どもたちが紹介。ギャラリィからは拍手が贈られた。短い時間の中にもそれぞれのデコチャリにはドラマがあった。小さい妹のために家族で作ったデコチャリ（写真⑤）。兄弟で作った真っ赤な「炎のバイク」。小学生の仲良し二人組は、「二人で乗れる自転車を作りたい!」と奮闘（写真⑦）。選んだ自転車に荷台がなかったため、大人たちの知恵も借りてサドルとハンドルの間に座れる仕掛けを作った。面白い事に「二人乗り禁止」と言う大人はこの場にはない。むしろ、器用に自転車を乗りこなす二人を応援した。実は子どもたち以上に大人たちも楽しんだ「デコデコちゃりんこ」であった。大人たちは自転車に乗る子どもたちの眼差しをとおして地域を再発見したようである。

デコデコちやりんこ 団地探検隊

聖徳大学大成ゼミ
常盤平アートプロジェクト
2012



①



③



②

「デコデコちやりんこ」

常盤平団地は、聖徳大学のある松戸駅から電車で10分程のところにある。この団地は60年代、高度成長期に建てられ、星形住宅（スターハウス）（写真①）や、さくら通り（日本の道100選）、ケヤキ通り（日本の街路樹100選）等々有名である。団地を訪れると緑が多く、まるで公園の中にいるような贅沢なつくりは、団地マニアにも人気が高い。一方、最近はその高年齢に伴い、孤独死が多い事でも有名になった。このような背景から、松戸駅周辺とは別に松戸市が、地域活性化や課題解決を目的にアートプロジェクトを行う企画をたち上げた。その第一回目の活動として行ったのがワークショップ「デコデコちやりんこ」団地探検隊である。この活動の企画、実施をおして住民や学生が常盤平の良さを発見したり、子どもたちが作ったアートな自転車（デコちやりん）が団地の名所を走ることによって地域が元気になることを目的とした。

当日は団地の子どもたち20数名が集まり、デコちやりん作りを学生や保護者、市職員らと行った。制作場所の公園には大きな木があり、そのまわりには、学生が集めた廃材や、「かえっこ」で残ったおもちゃを分類して置き、子どもたちはその中から使いたい物を自由に選んだ。接着にはグルーガンや結束バンドを使い、着色にはスプレーやアクリル絵具を使用した。完成したデコちやりんが揃ったところで学生の伴走で団地を走った。



①CG 作品「松戸百鬼夜行」。妖怪にはそれぞれ名前と設定がある。②会場風景 ③忘れ去られた物たち。選んで並べることもアートの勉強。④研究室で妖怪制作。忘れ去られた物と「かえっこ」で残った人形の手足等を組み合わせた。⑤北沢先生の子ども向け鑑賞ツアーも行われた。⑥大人もはまったワークショップ「こども百鬼夜行」の様子。考えた妖怪を写真に撮って名前や設定を考えワークシートを展示。⑦「恐怖！おばけ列車」。2時間程、集中して制作。⑧「こども百鬼夜行」のワークシート展示。⑨ゼミ生、記念撮影。⑩ HITOTZUKI による根本壁画通りの作品。「松戸アートラインプロジェクト2011」に先立って制作された。

(児童学科保育士養成コース3年 木村智美
現・公立保育士)

どのような空間で見せていくべきなのか、考える事も大切だと知りました。それは、他のアーティストさん達の展示を見ても一番に気になったところです。私達の会場はワークショップもできるようなにした為、多くの人々が集まる場面がありました。異年齢の人々が集まり、様々な意見や感じ方を聞くことができ、作品を異なった角度、新鮮な気持ちで見えることもできました。

今回のプロジェクトを通して、アートは誰もが身近に感じ、実際に思いを形にすることが出来るものだと思います。様々なジャンルのアーティストさん達の作品からも、アートに対して新しい見方が増えました。特に感じたことは、今までアートは見て楽しむものだと思っていましたが、五感で感じるものだと知りました。見て、聴いて、味わって、触って、感じて、全ての感覚を使ってアートは楽しいものなのだと思うようになりました。今回の体験から、日常の何気なく見ていた風景に対する感じ方も変わったように思います。

松戸百鬼夜行



■「松戸百鬼夜行」

「百鬼夜行絵巻」(室町時代後期)には使わなくなつて、忘れ去られた物が妖怪になり、夜な夜な行進するさまが描かれている。2回目の「松戸アートラインプロジェクト」では招待作家として、古くからある市内のお茶屋の倉庫で活動を行った。この倉庫には、使わなくなつて、忘れ去られた物が大量にあったことから、現代版の「百鬼夜行」を作ることにした。学生と倉庫にあった物からイメージを膨らましオリジナル妖怪を作った。展示ではCGと元ネタ(実物)両方見られるようにした。会期中はワークショップも行い、様々な年齢の人が妖怪作りを楽しんだ。このプロジェクトは「中房総国際芸術祭・いちばらアート×ミックス」の「内田百鬼夜行」につながっていく。(大成)

■「松戸百鬼夜行」を終えて…

自分達の作り上げた作品をこんなにも多くの人に見ていただくという機会は今まで無かったので、最初は全く想像が付きませんでした。短い制作期間の中で、妖怪が何を伝えたくて妖怪の姿になったのか、設定を考えるのは、モノの存在理由を考える必要もあり難しかったです。活動全体の中で一番大変だったのは、会場作りでした。会場作りは片付け、掃除から始まったので、一日の作業もあつという間に過ぎ、思っていたよりも時間がかかってしまいました。会場をどう作るかによって作品の見え方も変わるので、

大成哲雄+聖徳大学大成ゼミ
松戸アートラインプロジェクト
2011

かえっこバザール



Kaekko

2010～2012

①



⑤



③



②



④

①オークションの様子。がんばってためたポイントでも、競り負ければ欲しいおもちゃは手に入らない。②お仕事として、おもちゃの仕分けや整理をする子どもたち。10分で1カエルポイント貰える。③査定は、子どもがお仕事として行うこともある。子どもなりの査定基準が興味深い。④壁面装飾のお手伝い。てるてる坊主やお面を作る回もあった。⑤ポイントは色テープによって違う。

「かえっこバザール」

「かえっこ」はアーティストの藤浩志が考案したいらなくなったおもちゃを使って地域に新たな活動を作りだすシステムとしてのアートである。唯一ゼミのオリジナル企画ではない「かえっこ」は、アートパーク前(6月)にチームの団結力を高める目的や、アートを多様な解釈で理解するための手だてとして行ってきた。

基本的な流れは、まず、いらなくなったおもちゃを「かえっこバンク」に持って行く(写真③)。そこで、壊れていないか等を査定し、価値に応じた「カエルポイント」が発行される。査定の基準は基本的に3段階。色によって分けられる(写真⑤)。特に感動したおもちゃは最後のオークションにかけられる(写真①)。たまったポイントで他のおもちゃを買う事ができ、更にポイントのためたければ、「かえっこバンク」のお手伝いや、おもちゃの仕分け(写真②)、会場の装飾を作る等のお仕事をする。1日かけて集めたポイントを最後のオークションでどう使うかは子どもたち次第である。「かえっこ」をとおして子どもたちは社会の仕組みを少し理解することになる。オークションでは、子どもたちの一喜一憂する姿を見て、応援する大人たちも一緒に盛り上がる。「かえっこ」が全国各地でコミュニティ作りの方法として広く行われているのも頷ける。ゼミ生の会場作りのこだわりは、原色を貴重にお揃いの緑のティッシュやカエルに扮し、ブルーシートの池に蓮の葉の座布団を浮かべ活動を行うところである。(大成)

実施 聖徳大学大成ゼミ
聖徳大学生涯学習研究所 生涯学習フェスタ

お米屋さんプロジェクト

松戸パエリア こたつ DE アート

大成哲雄+聖徳大学大成ゼミ

松戸アートラインプロジェクト 2010



①「松戸パエリア」12月5日(日) 11時～14時頃 旧原田米店中庭で実施。おにぎりやみそ汁も学生が作った。地域の方は、この鉄板で焼きそばを普段焼いており、パエリアは作ったことがない。学生がかぶる三角巾はおにぎりのデザイン。②「こたつ DE アート」。こたつに入って来場者と交流を持った。③「おしゃべりバック」制作。④おにぎりから始まる「絵しりとり」。⑤「松戸パエリア」完成。⑥アーティストの遠藤一郎さんとアートに関して話を伺った。「未来へ号」で記念撮影。⑦隣の大山エンリコイサムさんとは制作から交流を持った。⑧松戸の様々な場所で展示が行われた。坂川での展示。山中彬充の「ニュートラル」。

実はこのワークショップはフアシリテーターが何も知らなかったらどうなるのか？という密かな実験でもあった。1回目は予想通り残念な結果に…(？)。その様子を見かねてか、ギャラリから地域の主婦が登場。「パエリアはこう作るのよ」学生らがその場で見よう見まねで作り方を伝授してもらった。そして見事パエリアが完成。地域には様々な力や知恵を持った人がいる、それぞれの力が生かされる場面をつくることはアートプロジェクトや「まちづくり」には大切なことである…そんなことを再考する機会にもなったワークショップであった。(大成)

「松戸パエリア」

「松戸パエリア」は、「お米屋さんプロジェクト」の関連ワークショップである。この活動を行うにあたって筆者が学生に出した条件は、初めて行く店で食材を買う事とパエリアの作り方を調べてはいけないという2点である。初めて入る店で店員と言葉を交わし、地域を発見する。松戸で購入した食材を使い、レシピなしで地域の人たちと丸覚えのまま「どうだっけ？」と言いつつ作るパエリアが「松戸パエリア」の活動である。



お米屋さんプロジェクト

Okomeyasan Project

大成哲雄+聖徳大学大成ゼミ
松戸アートラインプロジェクト 2010

①



④

③

②

①展示風景。旧米店入口の土間とその奥の空間で展示、活動を行った ②旧原田米店外観。回りにはマンションが建ち、ここだけ昔のままのたたずまいを残している。③使い終わった米袋で女子学生の象徴としてティディベアを表現。④「おにぎり部」の活動の様子を写真で表した作品。



「お米屋さんプロジェクト」

このプロジェクトは松戸市の本格的なアートプロジェクト「松戸アートラインプロジェクト（現・暮らしの芸術都市）」の1回目に実施した。約1ヶ月、駅周辺の様々な場所で約20組のアーティストが展示やパフォーマンスを行った。私と学生は、今は使われていない米屋で活動を行い、ゼミ生が架空のサークル「おにぎり部」の部員に扮し、様々な人々と関わりながらイメージを形にした。会期中は「松戸パエリア」や「こたつDEアート」などのワークショップも行いアーティストや地域住民、来場者と交流を持った。たった6人のゼミ生で短期間によくここまでできたと思える。アートパークとは違ったアートの地域と関わって行く実験的な試みがここから始まった。来場者数は全体で約3万人であった。（大成）

「お米屋さん」の活動を終えて...

私は、「松戸アートラインプロジェクト」で初めて「アーティスト」として活動を行いました。それまではアーティストというと、美術を専門に学んで作品を作っている人というイメージがありましたが、今回の経験でその考えが大きく変わりました。アートは誰にでも行える、様々な形があるということなんです。私たちの作ったおにぎり作品の基本となっているのは、紙粘土です。誰でも一度は経験しているであろう紙粘土から作った作品が、一流のアーティストの作品と並ぶというのは、なんとも面白かったです。

また、来場してくださった方やアーティストとお話したり、ワークショップで一緒

聖徳大学 大成ゼミの記録 2010～2014

もくじ

- P46 はじめに
- P45 もくじ
- P44,43 「お米屋さんプロジェクト」 大成哲雄＋聖徳大学大成ゼミ
松戸アートラインプロジェクト 2010（2010年11月20日～12月19日）
- P42 「松戸パエリア」「こたつ DE アート」 大成哲雄＋聖徳大学大成ゼミ
松戸アートラインプロジェクト 2010（2010年12月5日）
- P41 「かえっこバザール」 聖徳大学大成ゼミ
聖徳大学生涯学習研究所 生涯学習フェスタ（2010年～2012年）
- P40,39 「松戸百鬼夜行」 大成哲雄＋聖徳大学大成ゼミ
松戸アートラインプロジェクト 2011（2011年11月5日～27日 土日祝のみ9日間）
- P38,37 「デコデコちゃりんこ～団地探検隊～」 聖徳大学大成ゼミ
常盤平アートプロジェクト 2012（2012年11月18日）
- P36,35 「101人ライトドローイング」 大成哲雄＋聖徳大学大成ゼミ
松戸アートラインプロジェクト 2012 暮らしの芸術都市（2011年12月8日）
- P34,33 「つながる洋服プロジェクト」 大成哲雄＋KEYAKIDS＋聖徳大学大成ゼミ
暮らしの芸術都市 2013（ファッションショー実施 2013年12月8日）
- P32,31 「きのこロボット THE MOVIE」 聖徳大学大成ゼミ＋KEYAKIDS
暮らしの芸術都市 2013
- P30,29 「鑑賞活動」 聖徳大学大成ゼミ 旅するムサビプロジェクト
- P28 「坂川親水広場ワークショップ」 松戸市河川清流課 聖徳大学大成ゼミ（2013年）
- P27 松戸のアートを楽しむ！
- P26 編集後記

はじめに

聖徳大学児童学科のゼミは3年次と4年次に行われる。学生が興味を持った分野に分かれ、担当教員と少人数で研究を行う。文献研究やディスカッション等方法はゼミによって様々である。筆者は美術教育が専門だが、アーティストとして「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」や「いちはらアート×ミックス」などでアートプロジェクトの実践も行ってきた。そういったこともありアートプロジェクトの方法をアートや美術教育を考えるための学修プログラムにも応用出来ないかをここ数年、学生と実践をとおして研究している。前期は「アートパーク」、後期は松戸市のアートプロジェクト「暮らしの芸術都市」等で企画、実施。年明けには鑑賞活動を行うというのが「大成ゼミ」の最近の流れである。最低でも年間大小3つのプロジェクトを企画し、地域に出て実践する。幸いな事に聖徳大学のある松戸市は「子育て、教育、文化」をスローガンに掲げアート活動にも積極的である。2010年から「松戸アートラインプロジェクト（現・「暮らしの芸術都市」）」が始まり徐々に市民や学生にアートが身近なものになってきている。プロジェクトの実践研究を行うのに相応しいフィールドが地域にあり、「松戸」にこだわった活動を企画、実施してきた。

学生はプロジェクトをとおして様々な事柄を学んでいる。その中でも常に考えて欲しいのは「アートとは何か」という問いである。アートの学び方は様々あるが、アートプロジェクトをとおしての学びは、地域や社会と関わりながら多くの人たちとイメージを形にしていく実践学修である。アートを理解するには実際にやってみないと分からないと思う。体験をとおし「アートとはこういう事かもしれない」、「アートをとおしてこういうことが見えて来た」など、各自の考えが持てると良い。イメージを形にしていくことは容易ではない。毎年、筆者の無理難題を受けてプロジェクトとして形にしていく学生の力は凄いと思う。また、地域や行政などの協力無しでは実現出来なかった活動も多々ある。関わっていただいた方々にこの場を借りてお礼を申し上げたい。今回は、ここ数年のゼミの活動を一旦まとめ、これからを考える材料にしたい。

聖徳大学 児童学科 准教授 大成哲雄



SEITOKU UNIVERSITY ONARI SEMINAR ART PROJECT DOCUMENT 2010~2014

聖徳大学 大成ゼミの記録

2010~2014

